

# 大学入試センター試験「英語」で測定される 英語学力の経年比較

杉野 直樹 (立命館大学)・荘島 宏二郎 (大学入試センター)・清水 裕子 (立命館大学)・  
中野 美知子 (早稲田大学)・山川 健一 (安田女子大学)・  
大場 浩正 (上越教育大学大学院)

英語学力, 大学入試センター試験, 潜在ランク理論

## 1. 概要

吉村他 (2005) は、1990 年から 2004 年における大学入試センター試験「英語」(以下、センター試験) 実受験者の能力推定値の経年変化を、共通被験者計画によるデータの尺度等化を用いて調査した。その結果、1994 (平成 6) 年 4 月に発効した学習指導要領の下で学習した高校生が最初にセンター試験を受験した 1997 年を境として、能力推定値が明確に下がっていた。しかし、この調査では、観察された能力推定値の下降が具体的にどのような下位能力の影響によるものであるかは明らかにされていない。

この点に関して、発表者らはこれまで、1990 年度・1997 年度・2004 年度のセンター試験受験者のデータに基づき、潜在ランク理論 (Shojima, 2008) を援用して各年度の受験者の能力記述文体系を構築してきた。本研究では、これまでの研究で得られた知見を踏まえ、能力記述文に現れる英語学力の経年的な変化を調査することを目的として、共通被験者計画による尺度の等化を行った。

## 2. 背景

ヨーロッパ共通参照枠 (CEFR) を始めとして、これまでいくつかの能力記述文体系が提案され、またそうした枠組みを日本の学校英語教育や個々の教育機関の実態に適合させる試みがなされている (投野, 2010 ; 拜田, 2012)。しかし、例えば Long, Gor, and Jackson (2012) が指摘するように、こうした包括的な熟達度の評定は客観的な基盤を持たず、経験と主観に依るところが大きい上に、熟達度の下支えとなる目標言語の習得段階との関連性についての検討がなされていない。例えば、投野 (2010) で報告されている妥当性検証も、まずは主観的に能力記述文が選定・配列され、その後それぞれの到達段階に特有の言語的特徴を明らかにする、というアプローチを採っている。

全体的到達度と能力記述との関係の曖昧さは、吉村他 (2005) の調査にも指摘できる。吉村他 (2005) では、大学入試センター試験「英語」実受験者のデータに基づき、共通被験者計画による尺度等化を行った上で、英語学力の経年変化を調査している。この調査の結果、1997 年度を境に能力推定値の低下が観察された。対象とする学習者の面でもまた学力の面でも極めて限定的 (センター試験を受験する学習者層の持つセンター試験で測定される学力) であるだけでなく、項目応答理論に基づくこの調査では、各年度受験者の能力推定値の平均値が比較され、全般的英語学力を構成する個々の下位能力の経年変化までは明らかにしていない (この調査全体の留保すべき点については、吉村 (2006) も参照されたい)。

こうした背景を踏まえ、発表者らは、潜在ランク理論 (Shojima, 2008) の援用により、一方で実際のテストの項目分析に基づく能力記述文体系を構築すると共に、他方で複数の言語項目を扱う文法性判断タスクに基づく習得段階を提示し、全般的な熟達度と言語項目の習得段階の関連を明らかにしようとする研究を行っている。これまでのところ、前者については、センター試験のデータに基づいて 1990 年度・1997 年度・2000 年度それぞれの能力記述文体系を構築し、また後者については、非対格/非能格動詞等の動詞群、および関係詞節に関する習得段階を提示した。本発表は、これらの体系の直接比較を可能にするために尺度等化を行う段階の中間報告である。

### 3. 調査

#### (1) 調査の目的

各年度の項目難易度を同一の測定尺度上で比較すると共に、各潜在ランクに配属される年度ごとの受験者比率を比較することを目的として、1990年度・1997年度・2004年度問題の尺度を等化する。

#### (2) 等化用テストセットの作成

1990年度・1997年度・2004年度問題をそれぞれ第1問から第3問までの前半部と第4問から第6問までの後半部に分け、以下の6通りの組み合わせでテストセットを作成した。

Form A : 1990年度前半部 (37項目) + 1997年度後半部 (18項目) 計 55項目

Form B : 1990年度前半部 (37項目) + 2004年度後半部 (18項目) 計 55項目

Form C : 1997年度前半部 (32項目) + 1990年度後半部 (19項目) 計 51項目

Form D : 1997年度前半部 (32項目) + 2004年度後半部 (18項目) 計 50項目

Form E : 2004年度前半部 (32項目) + 1990年度後半部 (19項目) 計 51項目

Form F : 2004年度前半部 (32項目) + 1997年度後半部 (18項目) 計 50項目

これら6種類のテストセットを各実施会場でそれぞれ同数となるようにランダムに配布した。

#### (3) 調査参加者

本発表段階での調査参加者は日本の複数の大学の学部生約100名である。

### 4. 分析

潜在ランク理論による分析では、各項目に対し項目参照プロファイル (IRP) が算出される。IRPは各ランクの学習者の当該項目に対する正答確率であり、項目難易度はIRPが最も0.5に近いときの潜在ランクの位置として示される。測定尺度の等化により、対象となる156項目の項目難易度を直接比較できるとともに、潜在ランクも統一されるため、各年度の熟達度の特徴を分析することも可能である。

### 5. 引用文献

- 拝田清 (2012) 「日本の大学言語教育におけるCEFRの受容—現状・課題・展望—」『科学研究費補助金基盤研究B研究プロジェクト報告書：EUおよび日本の高等教育における外国語教育政策と言語能力評価システムの総合的研究』 Retrieved from [http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/EU\\_kaken/houkokusho.html](http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/EU_kaken/houkokusho.html)
- Long, M., Gor, K., & Jackson, S. (2012). Linguistic correlates of second language proficiency: Proof of concept with ILR 2-3 in Russian. *Studies in Second Language Acquisition*, 34, 99-126. doi: 10.1017/S0272263111000519
- Shojima, K. (2008). Neural Test Theory: A latent rank theory for analyzing test data. *DNC Research Note*, 08-01. Retrieved from <http://www.rd.dnc.ac.jp/~shojima/ntt/paper.htm>
- 投野由起夫 (2010) 『科学研究費補助金基盤研究A：小、中、高、大の一貫する英語コミュニケーション能力の到達基準の策定とその検証（中間報告書）』 Retrieved from <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/tonolab/cefr-j/research.html>
- 吉村幸 (2006) 「英語学力の経年変化」山森光陽・荘島宏二郎（編著）『学力—いま、そしてこれから—』 (pp. 100-115) 京都：ミネルヴァ書房
- 吉村幸・荘島宏二郎・杉野直樹・野澤健・清水裕子・斎藤栄二・根岸雅史・岡部純子・フレイザー, サイモン (2005) 「大学入試センター試験既出問題を利用した共通受験者計画による英語学力の経年変化の調査」『日本テスト学会誌』, 第1号, 51-58.